

## 対面参加者の質問

(時間切れで質問できなかった) 保育者(幼稚園教諭)の方

「利他的な遊び場」という視点がとても刺激でした。

ところで、日本にも(割合は少ないのですが)面白い公園が各地にある事や、熱心な設計者や企画者がいることが判り、北村先生の本がきっかけで遊具を作った保育者がいたエピソードからも、保育現場に子供の遊ぶ環境と真摯に向き合う人材がいる事も分かります。(プレイパーク世田谷の)天野さんなど精力的な実践者がいる事も知っています。

私の体感では、病んでいる遊び場の健康を回復させる事はある程度実現可能な気がします。その一方、公園に、もはや子供がいない・行かない現象が起きていたり、子供に関わる成人や子供に関心のある成人の絶対数が少なかったりする中で、

**遊び場へのアプローチに社会を変える力はあると思うかを質問したい**とっていました。

利他の視野がないのはもはや社会全般であり、電車の席の譲り合いから、外交政策まで…

**利他の生まれる子供の場所が、利他のある社会を創る将来の大人をつくれるのでしょうか。**

仮に遊びで子供を健康に育んでも、例えば学校ではその健やかさを活かさない mismatch が起きている気がします。遊び場に注力すれば利他の社会がつくれるのかもしれませんが、

**社会のどの部分を動かしていけば、遊び場を活かせると思うかを、社会学的見地(?)から伺いたい。**

ありがとうございました。帰りに電車の中で入力したので、なんだか変な文になっています。すみません。

## 保育者の方への応答

北村匡平先生

「子どもたちの利他的な場所をつくれれば、利他的な大人の社会ができるのか」と言えば、そんなに単純な話ではないと思います。フィールドワークを重ねるほど、そう痛感しています。たとえば私が調査している森のようちえんでは、自然の中で日々遊びを実践し、他なるもの(自然も含む)への感度が高まっています。それでも、すでに述べたように、小学校に進むと、その感性が薄れてしまうことが少なくないようです。森のようちえんに限らず、幼児期に多様な遊びを実践している方々はたくさんいますが、学校教育という制度に入ると、子供はかなり変わってしまう。現場からは、そんな声もよく聞きます。

以前、「未来の体育共創サミット 2025」という体育教育に携わる先生方が集まる学術系イベントに招いていただいた際にも、体育の二極化が進んでいること、運動嫌いの子供が増えてきていることなどに、先生方が強いジレンマを抱えている様子が印象的でした。運動学習理論としての「エコロジカル・アプローチ」などは、私が『遊びと利他』で書いた内容とも通じる部分があり、とても示唆的です。よければぜひ調べてみてください。

そう考えると、幼児教育と児童期(小学校以降)をつなぐ「橋渡し」が、いま非常に重要なのではないかと思います。幼児教育と学校教育を担う先生方のあいだで、子供の遊びや発育をどう捉えるかについて、共通認識や文脈をもう少し丁寧に形成していく必要があると感じています。

そしてもう一つ、放課後の遊びの時間を、意識的に取り戻していくことも大切ではないでしょうか。現代の子供は習い事に追われ、外で遊ぶ時間そのものが不足しがちです。親の視線から少し離れた、子どもたちだけの自由な遊びの時間を「つくる」ことは、簡単ではないにせよ、不可能ではないと私は考えています。

## リモート [チャット] での質問

(時間切れで応答できなかった) リモート参加の方

本日のトピックである「遊び場」は、子どもたちの学びと成長の場としての本質を再定義する、非常に意義深い視点であると受け止めております。 つきましては、こうした環境で感性を育んだ子どもたちが、将来どのような大人へと成長し、いかなる人生やキャリアを歩んでいくことを理想とされているか、ぜひお聞かせください。

## リモートで質問の方への応答

北村匡平先生

森のようちえんで幼児期を過ごすと、本当に他者だけでなく、周囲の環境に対しても驚くほど開かれた人間に育つと保育スタッフの方は話してくれました。現場の方々の話を聞き、現場の訪れて、そう実感します。毎日、変わりゆく自然（ときに恐ろしく、過酷でもある）を前に生活しているからこそ、相手のこともじっくり観察し、「何をしようとしているのか」「何を求めているのか」を想像する力が育つのだろう、と。整えられた快適な部屋でゲームなどをして過ごす日常と比べれば、たしかに納得がいきます。

ただ、保育スタッフの方によれば、小学校に進むと「普通に順応してしまう」子供が多いそうです。だからこそ、世界に想像力を働かせられる環境を、幼児期だけで終わらせず、小学校でも中学校でも持続的に用意していく必要があるのだと思います。その意味で、自然の中で思いきり遊ぶ時間は、やはりとても重要なのではないのでしょうか。

いま人文学では、ケア論などの文脈で「多孔的な自己」という概念が重視されています。これは、強く完全で、外界の影響を受けない確固たる自己ではなく、不完全で、外界の影響を受けやすい自己のことです。一見ネガティブに見えるかもしれませんが、脆弱であるがゆえに世界に開かれている自己であり、輪郭が緩やかで、内的世界と外的世界を行き来できるものでもあります。他者との関係性のなかで相互補完的な社会を理解するうえで重要だと議論されており、子どもにはもともと、こうした性質が強くあると思うんですね。

そして遊び場は、この「多孔性」を良い形で育ててくれる場所だと思います。ところが公平性の名のもとに回数を制限したり、年齢を超えた交わりを避けたりすると、かえって自己を閉ざす方向に働きかねない——私はそう感じています。